

岡部伊都子著『シカの白ちゃん』から

随筆家の岡部伊都子さんの著書『シカの白ちゃん』（1983年刊、筑摩書房）から少々長くなりますが、はじめの4章をご紹介します。

（I）

あるとしの 夏のこと。

奈良のこうえんに、一とうのシカの子が うまれました。

はにかみやの おかあさんジカは、人のしらないうちに、あかちゃんをうんだのですね。

林のなかの、しげったシダの はかげに、うまれたばかりの シカの子が、うずくまっていました。

すみきった、くろい目。

てんてんと、白いもようの とんでいる ちゃいろのからだ。

この小さなシカの子は、まだ じぶんがなになのか、よくわからないように、みずみずしい目で、ちかづくものを見えています。

おかあさんジカは、ぬれた子ジカの 小さなからだを、なめました。せなかも、足も、ていねいに、なめました。おかあさんのしたは、すいつくようです。きもちよくなります。いま、いずみで、あらって かわかしたような、きよらかなすがたになりました。

いい子です。

女の子です。

でも……、ほかのシカとは ちがうようです。 おかあさんジカが、くびをかしげて 身をすりよせると、子ジカは、おかあさんの おちちをさがして、くっく、くっくと すいました。おかあさんは、うれしさと、ふしぎさとに、むねが、ろんろん なるようでした。



(Ⅱ)

おかあさんジカの むねが、ろんろん なったはずです。おとうさんジカや、おばあさんジカ、ほかのたくさんのシカたちは、そのシカの子を見て、びっくりしました。

こうえんへあそびにくる 人間のおとなや子ども、たくさんの人たちも、そのシカの子を見て、びっくりしました。

みんな、これまで、こんなシカの子を 見たことがありませんでした。

この、うまれたばかりの シカの子の ひたいには まっ白なやわらかな毛が、まあるく かたまって ついていたのです。

どういう うまれあわせでしょうか、まるで 白い花かんむりを、ひたいにかざしているようにみえます。

奈良のシカには、千二百ねんもの むかし、春日神社のかみさまが、白いシカにのって みかさやまへ おりてきたという、いいつたえがあり、ながいあいだ、かみさまジカとして たいせつにされてきました。

まっ白なシカが いたそうです。

りっぱな大ジカも いたそうです。

けれど、ふつうのシカのからだで、ただ、ひたいの まんなかに 白い毛をあつめた シカなんて、これまで、うまれたことがありません。かぜがふくと、やわらかな白い毛が、ふわふわ ゆれました。

「あれは白ちゃん。そうよ、シカの白ちゃんよ」

日本じゅうから 名をつのって、白い花かんむりをもつ シカの子は、「白ちゃん」と、よばれるようになりました。



(Ⅲ)

小さなシカの子の はだは、うすくて やわらかです。

だから、アブや、ハチがさします。血をすいます。毛のなかへ 虫がくいついて、かゆくて たまらないこともあります。

なにをされても、首をふったり、からだを かんだりしてみるだけ。ときどき、おかあさんが 首のあたりを やさしく かんてくれます。

あるゆうがた、人のすくなくなった うすぐらい こうえんで、白ちゃんはくさをたべているおかあさんから はなれて、いいにおいのするほうへいって みました。

人間が、あまいにおいのするパンを こぼしていました。おかあさんのおちちとにた、おいしそうな においでした。

と、とつぜん、なまぐさいかぜとともに 大きな くろいかたまりが、こちらへ とんできます。白ちゃんは、なんともいえない こわさをかんじて、足がすくんでしまいました。

「ああっ、なんだろ！」

そのときです。

からだじゅうの 毛をさかだてた おかあさんジカが、白ちゃんのまえへ、だつと、とびだしてきました。白ちゃんに とびかかろうとした のら犬へ、ひっしのいきおいの おかあさんが、ぎゃくに とびついてゆきました。

犬は、おどろいて、にげました。

あくるあさ、興福寺の五重塔のそばに、小さなシカの子が たおれていました。

白ちゃんは おかあさんに まもられましたが、にげおくれたシカの子が、犬に おなかをかまれてしまったのです。

「奈良のシカあいごかい」の おじさんが、

「ことしは もうこれで、十とうめだ」

と、かなしそうに つぶやきました。



(IV)

とびひ野、かすが野。

なだらかな わかくさ山。

ふかい森の みかさ山。

シカは、おとこジカと おんなジカとが、それぞれ べつのグループをつくって、くらしています。あかちゃんジカや、少年ジカは、おんなジカのグループにはいっています。

白ちゃんのおかあさん、おばあさん、おねえさんや おともだちのいるおんなジカのグループは、はくぶつかんの よこで、ねていました。

おひるのあそびばは、興福寺のちかく。グループによって、いばしょがちがうのです。

むかしからの木が みどりこくはえている かすがのおく山へ はいって、山ジカとなった シカがいます。かとおもうと、ゆうがたの町へさんぽにゆく シカもいます。ちかくのはたけの さくもつをたべて、しかられているシカもいます。

人間の子どもたちは、シカがだいすき。すぐそばまで シカがきて、じぶんの手から シカせんべいを たべてくれると、うれしくなります。

でも、なんとも ちかよってくるので、こわくなって なく子もいます。

白ちゃんを 見ようとして、人がいっぱい やってきました。

花かんむりの白ちゃんは、さいこうの、にんきものでした。



(IV) 章まで書きましたが、物語は (XVII) 章までつづきます。あとは実際に本を手にとってお読みいただくことをお奨めします。

白ちゃんは、1954年生まれ。頭に白い冠状の毛が生えていて、人間たちは「奈良公園の女王」ともてはやしましたが、シカの仲間からは警戒されてしまいます。そして、おかあさんジカは人が捨てたビニールを食べたのが原因で死んでしまいます。白ちゃんは8年目にして漸く授かった子ジカが、生後6日で車にはねられ死んでしまうという不幸に遭います。その後は長い孤独のうちに生きた白ちゃんもまた18歳で交通事故死(1972年)するのです。

著者の岡部伊都子さんは「白ちゃんは、突然変異とでもいうのでしょうか、シカの歴史のなかでも、めずらしいすがたで、この世に、うまれてきました。ほんとうにいたシカです。子ジカのころから「しずけさ」「けだかさ」をかんじさせる白ちゃんでした。白ちゃんがようやくあかちゃんをうんだこと、そのあかちゃんが車にはねられたことなど新聞でよみました。(中略)

小さな人へのおはなしをかくのは、とてもむずかしいことです。それでも、「白ちゃんがいたことだけでも話しておこう」と、じぶんをはげまして、長いあいだ、だいてきた白ちゃんのおもかげを、はじめてつづりました。(中略)

どうか、白ちゃんが、あなたのおこころにもつつまれますようにと、いのりまして」と記しております。

なお、この物語は中国語対訳も出版され、日本語と中国語で「シカの白ちゃん」へ捧げる歌までつくられました。

